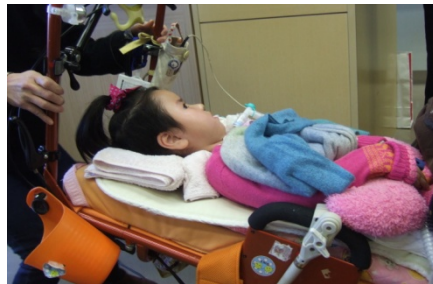


「最終講義」の思い出

私にとって「節目の年」2014年も今日で「最後」である。35年にわたる教員生活を無事に「卒業」し、苦しいことも多かったが、それなりに充実した生活を送ってきた。退職してから集中的に作業して『災後の新聞』を出版し、8月からレポートを毎日書き続けている。

忘れられないのが、2月22日2時から201教室で行った「最終講義」である。いまでも、あのときの感動がよみがえってくる。写真のように、教室一杯の学生・卒業生、市民の皆さんの前で、90分にわたり「地域から現代社会を考える」のテーマで語った。講義後にもらった「激励のことば」、そして持ちきれないほどの花束や贈り物、卒業生や友人との歓談などが思い出される。

レポートにも何回か書いてきたが、寒いなか京ちゃんご家族に来てもらったのが、なんといっても嬉しかった。お母さんからのメールによると、教室内の一体感あふれる熱気に京ちゃんも「ドキドキ緊張した」ようだ。講義のあとに、京ちゃん手づくりの



すてきな色紙をもらった（12月7日のレポートに掲載したが、もういちど）。京ちゃんは自分の作ったものをしっかり手渡せて嬉しかった、とのことであった。

「最終講義」のさいごに、現代社会に関心を持ち、新聞に投書などして自分の意見を主張しようと呼びかけた。まずは自ら実践しようと、5日後に中日新聞「発言」に投書した。掲載されないと諦めていたが、3月18日に掲載予定とのこと。すぐに京ちゃんご家族に電話した。京ちゃんが嬉しくて電話のボタンを押したという。

お母さんから18日午前メールが届いた。朝、先生の「発言」を家族揃って拝見しました。新聞を開き「あつた〜！」と京香のベッドを囲んで広げ、読みあげると真剣な目で新聞を見ていました。朝の登校を担当するヘルパーさんが新聞を読んで泣きました。みんな、朝から心がほかほかです。

「最終講義」の思い出とともに、今年も暮れようとしている。明日から新しい年だ。

(2014年12月31日)